

ダレン・ウッズ

エクソンモービル会長兼CEO

V字回復を果たした「たたき上げ」リーダー
激変のエネルギー業界で

ロックフェラーの系譜を引く 世界最大級の石油メジャー

石油王ロックフェラーが19世紀後半に創設したスタンダード・オイル社を起源とする米エクソンモービル社。米テキサス州に本社を置き、石油・天然ガスの探鉱から開発、生産、輸送、精製、販売までを手がける世界最大級の民間石油会社だ。2025年12月期の売上高は約3,239億米ドル（約52兆円）。時価総額は米国企業で17位（7月中旬時点）と競合の米シェブロン社を大きく凌ぐ。地政学リスクや脱炭素などの課題に直面しながらも、巨大企業の舵取りを担うのがダレン・ウッズ会長兼CEO（60歳）だ。



1999年、エクソンとモービルの合併で誕生

1965年、米カンザス州に生まれたウッズ氏はテキサスA&M大学などを経て1992年に同社に入社。CEO就任までの25年間、「国内外で11回の転勤と19の異なる役職を経験した」という「たたき上げ」のリーダーだ。原油・天然ガスの供給・輸送や原油の精製、石油化学製品の製造といった「下流部門」で要職を歴任。担当部門を同社の収益力を支えるまでに成長させた実績が評価され、2017年に会長兼CEOに昇格した。探鉱・開発など「上流部門」が主流とされる石油メジャーで「下流部門」出身のトップは驚きをもって迎えられた。

コロナ禍の「逆張り」が奏功 現実路線の低炭素戦略にも注力

とはいえ、CEO就任後の道のりは決して平坦なものではなかった。“脱炭素ブーム”で欧州企業が再生エネルギー投資に舵を切る中、化石燃料への投資は投資家から「時代遅れ」と批判を受けた。追い打ちとなったのが、2020年に起きたパンデミックによる世界的なエネルギー需要の激減だ。原油価格は暴落し、通期決算で上場以来初の赤字に転落することになった。

危機を乗り越えるためにウッズ氏が下した決断は「選択と集中」。同業他社が大型投資から撤退する中、徹底したコスト削減を進めつつも、米国のシェール最大生産地のパーミアン盆地や南米ガイアナ沖の巨大海底油田といった、将来の高収益が見込める案件への投資は継続。危機下での化石燃料部門への「逆張り投資」は、ロシアのウクライナ侵攻によるエネルギー逼迫に同社の競争力を回復させる原動力となり、2022年決算では約557億米ドルと過去最高益を達成。業績・株価ともに、V字回復を遂げることとなった。「脱炭素に乗り遅れたエクソンモービル」という市場の評価も覆し、現在ではCCS（二酸化炭素の回収・貯留）などの低炭素技術にも注力している。



CERAWEEK（国際エネルギー会議）で議論するウッズ氏（右）

写真：ロイター／アフロ、AFP／アフロ

Profile **だれん・うっず** 1965年米カンザス州生まれ。1987年にテキサスA&M大学卒業後、ノースウェスタン大学でMBA取得。1992年にエクソン・カンパニー・インターナショナル入社。2017年エクソンモービルの会長兼CEOに。世論や一時的な圧力に流されず、ファクトと理論に基づいて決断を下す「現実主義」のリーダーとしても知られる。

主な参考文献：日本経済新聞、ロイター、BBN Timesほか